



▲来館者は「光が反射して、すごくきれい。元気になる」と話していました

市政トピックス

廃棄予定の傘で地域を明るく元気に

宮城野小学校6年生の児童による作品展「Miyachugaya Rii Anburelascay」が1月19日から2月7日まで宮城野区文化センターで開催されました。会場となった1階ロビーの吹き抜けには、児童が思い思いに装飾したカラフルなビニール傘40本が吊り下げられ、施設を明るく彩りました。

開催のきっかけは、地域のまちづくりやまちの課題を調べ、目指すまちの姿を提案する「町の未来をえがこう」という授業。市職員から環境問題をはじめ、さまざまな市の課題に関する話を聞く中で、



▲空は晴れ渡り、海風も強く、絶好のたこ揚げ日和でした



▲ここにアクリル絵の具でカラフルに色付けしました

市政トピックス

荒浜地区のかつての暮らしに思いをはせてー深沼海岸でたこ揚げ

1月23日、若林区荒浜で「深沼海岸で凧揚げしよう！」が開催され、色とりどりに描かれた、たこが青空に舞い上がりました。かつて、正月には近くの竹やぶから採った竹でたこを作り、たこ揚げを楽しんでいた沿岸部の子どもたち。このイベントは、東日本大震災以前の荒浜地区の暮らしを楽しみながら伝えようと、せんだい3・11メモリアル交流館が企画しました。

当日は、5歳の子どもから大人まで11人が参加。震災遺構仙台市立荒浜小学校で、荒浜地区の暮らしや文化を伝える映像や震災前の街並みを再現したジオラマを見た後、「仙台風の会」が制作したたこに、自由に色付けを行いました。その後、いよいよ深沼海岸に移動してたこ揚げにチャレンジ。最初はなかなか揚がらず苦労していましたが、海から吹く風を受け、たこが空高く上がると大きな歓声が。子どもたちも砂浜を走り回り、一生懸命にたこを上げていました。参加者たちは「久しぶりにたこ揚げをして懐かしかった。昔の遊びを伝えていきたい」「広い海を見ながらのたこ揚げが最高に楽しく、夢中になった」と笑顔で語っていました。

市政トピックス

市政トピックス

イタリアパラリンピック選手の写真展を開催

1月30日から2月3日までの5日間、せんだいメディアテークに会場に、イタリア人写真家のオリビエロ・トスカニーニ氏が撮影したイタリアパラリンピック選手の写真展を開催しました。



▲選手たちの写真は、高さ3メートル、幅2メートルの迫力ある大ききで飾られました

たイタリアパラリンピック選手の写真展「NAKED」が開催されました。この写真展は、障害のある方を取り巻くさまざまな障壁の解消を目的として、2019年にイタリアで行われたもの。本市が、東京2020オリンピック・パラリンピックにおけるイタリアのホストタウンとして相互交流を行っていることから、開催が実現しました。会場には、12人の選手それぞれの顔のアップ、勇ましいユニフォーム姿、ありのままの裸体を写した3枚1組の写真が展示。自信に満ちた力強い表情や、鍛え抜かれた身体からは、肉体的・精神的な強さと美しさが溢れ出ていました。期間中は、市内の小学生によるイ

市政トピックス

若き「まちの特派員」たちが活動成果をプレゼンテーション

若い世代ならではの視点でまちづくりを考える「仙台まちづくり若者ラボ」の最終報告会が、1月14日に市民活動サポートセンターで行われました。10代から30代までの学生や社会人が、「まちの特派員」として9月から5カ月間にわたり行ったワークショップや取材などの活動成果と、これからのまちづくりに向けて自分たちが取り組む行動を発表。6つのチームが「学生と社会人が意見交換する場を作り、仙台への愛着や、働く理由を考える」「まち全体をキャンパスに見立て、仙台の魅力を学び、多様な人とながらることのできるスタディーツアーを開催する」など、熱のこもったプレゼンテーションを行いました。

発表を終えた参加者たちは達成感に満ちた表情で、これからもまちづくりに関わる活動を継続していく決意を新たにっていました。

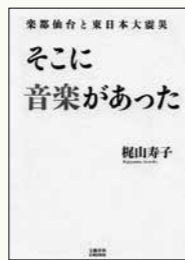
市政トピックス

新型コロナウイルスワクチン接種推進室を新設

市では、新型コロナウイルスワクチンの接種に向けた準備を集中的に進めていくため、1月25日付で健康福祉局に部相当の「新型コロナウイルスワクチン接種推進室」を新設しました。

円滑なワクチン接種に向けて、医療機関等との調整や、接種会場の確保・運営、接種相談受け付け等の業務を進めていきます。

3.11 震災文庫を 読む



榎山寿子/著 文藝春秋企画出版部刊

「そこに音楽があった 築都仙台と東日本大震災」



菅野正道/著 菅山房刊

「イグネのある村へー仙台平野における近世村落の成立」

東日本大震災を語り継ぐため市民図書館に設けた「3・11震災文庫」。所蔵する約1万冊からよりすぐりの本を「紹介します」

音楽の力と歴史の大切さ 宮城学院女子大学現代ビジネス学部教授 宮原 育子

ノンフィクション作家の榎山寿子さんが、震災直後の全国的な自粛で街から音楽が消えたことにショックを受け、被災した人々にとっての音楽とは何かをテーマに、仙台での取材をまとめた貴重な一冊です。被災者と音楽家両者への丁寧なインタビューから、仙台で多様な音楽活動をしていた市民や愛好家たちが、震災後には、音楽によって人々を励ますさまざまな活動を進めたことが書かれています。この本から、仙台が文字通りの「楽都」であり、音楽は、どんな厳しい状況の中でも私たちが力づけてくれる大切な存在であることが伝わります。

仙台市博物館市史編さん室長(当時)の菅野正道さんが、2011年の震災津波によって被災した仙台市東部、若林区の六郷と七郷の歴史を中世から近世初頭の時代に絞って紹介した本です。全86ページの中に、古文書や遺跡の発掘などから明らかになった地域の成り立ちを知ることが出来ます。古くから多くの人が住み、寺院の多い六郷と、江戸時代からの仙台藩の大規模な新田開発によって拓けた七郷。そこで農村の人の暮らしを支えてきた「イグネ」は、津波の被害で危機的状況にあることなどが語られています。地域の歴史をたどることの大切さが分かる一冊です。

●紹介した本は、市民図書館でご覧いただけます 問市民図書館 ☎261・1585